225
2023.4.1

学会ニュース

The Academic Society of Tokyo Woman's Christian University

▶ 2023 年度　学会活動（予定）　2 頁
▶ 2022 年度　学会活動報告　3 頁

自ら学ぶ、自らを学ぶ

東京女子大学 学会委員長
歴史文化専攻　白　井　恵　一

新入学生のみなさん、はじめまして。東京女子大学学会からご挨拶さしあげます。

いきなり、「東京女子大学学会」と言われても、いったい何のことかと思われるでしょうね。一般に「学会」といえば、分野別に組織され、研究者たちが研究成果を蓄積し、お互いに議論を戦わせながら学問の発展を追及していく、そんなところで、あるいはみなさんもニュースなどで目にしたことがあるかもしれません。「東京女子大学学会」は、そのような一般的な「学会」とは異なり東京女子大学の教員と学生を会員として、学生のみなさんが「自ら学ぶ」ことをお手伝いする組織です。みなさんは東京女子大学の新入生であると同時に「学会」の新会員でもあるわけです。

さて、「自ら学ぶ」とはどういうことでしょうか。みなさんは、今までも既に自ら率先していろいろなことを学んで、役に立つ知識やスキルをたくさん身につけてきたでしょうし、大学で学びたいこともそれぞれお持ちでしょうから、そんなことはよくわかっている、と思われるかもしれません。しかし新しい学びの場に足を踏み入れたこの機会に、ちょっとたちどまって「そもそも何か」ということを考えてみるのも悪いことではありません。

既にある情報を大量に迅速に収集すること、この問題にはこの方法と、既に定まったスキルを効率よく身につけること、こういったことはもちろん重要で役にたちます。ですからこれから大学でもさらに磨きをかけてゆく必要があるわけですが、千差万別多種多様なスキルをできるだけたくさん身に付けるということばかりに躍起になっていると、「誰のために」「何のために」ということが忘れられがちです。スキルは「道具」ですが、道具を使うのは他の誰でもないあなた方、「この私」です。

「私とはいったい何なのか」、「私はほんとうはどこまで『私』なのか」というのは、なかなか難しい問題です。今の世の中の常識や通念にすっかり染まって、「それが私」と思いこまされているだけかもしれません。あるいは逆に、自分以外の誰か、現代社会や世界を「そのようなもの」と勝手に思い込んでいる「私」がいるのかもしれません。世界が、人々が多様であること、その中に「かけがえのない私」や「あなた」がいること、そんなことを体感できる場所は、実はなかなか見つけることが難しいものです。大学はそのような貴重な場所のひとつです。「私」自身を問い直すこと、自分自身を変化させながら新しい世界へ足を踏み入れていくことに大学で学ぶことの価値が、なによりその喜びがあります。このような学びは「よく生きること」にとても役に立ちます。思いもよらなかった新しい世界の

入り口が隠れているかもしれません。東京女子大学学会は、そのようなみなさんの活動をサポートする場所ですから大いに活用してください。

発足は1950年5月で70年以上も前のことになります。発足時の「趣旨」には「長老も青年も専門家も学生も、ひとしく謙虚に真理をもとめて再出発すべき」という目的が述べられています。当時は戦争の記憶がいまだ生々しい中、東京女子大学が新制大学として生まれ変わって2年後のことで、「再出発」という言葉が用いられているのは、そのような事情を踏まえてのことでしょう。ひるがえって現状を見れば、コロナ禍で社会の在り方も人々の生活も、大学もまた大きく変化しました。国際情勢も緊迫し未来は混沌としています。今は老いも若きも「ひとしく謙虚に」自分自身を省みて、いたずらに迅速な解答ばかりを求めるのではなく、問題の建て方自体を模索し、まだ見ぬ新しい世界に「再出発」する時です。

大学の公式サイトに学会のページがあるので、一度見てみてください。講演会や研修会、学術交流会や学術雑誌など、さまざまな活動の報告をみることができます。中でも学会では、学生のみなさんが自主的に行うグループ研究に年2回「学生研究奨励費」を出しています。自分たちがやりたいテーマを決め、学年専攻の違いを越えて仲間が集まって活動を行い、その成果を「成果発表会」というかたちで、みなに知ってもらうことができるのです。もちろん必要な助言を教員から受けることもできますし、申請して採択された場合8万円までの「研究奨励費」を給付されます。半年ごとに申請の機会がありますから、是非一度チャレンジしてみてください。

自らの関心を深く掘り下げるだけでなく、仲間と共有し、さらに多くの人たちに知ってもらう。知的好奇心を大きく外に広げてゆく喜びを、この学会という場で見つけていただきたいと願っています。

2023年度 学会活動（予定）

◆始業講演／学生研究奨励賞グループによる発表

学内限定オリエンテーション特設サイトにて配信

「六十年前の葬式の白黒写真」　歴史文化専攻教授　高田　陽介（学会 史学部会）

学生研究奨励賞受賞グループ発表

「屋外空間のさらなる活用に向けた社会実験」　伊藤　花織　他8名

◆学術交流会

詳細は後日ご案内いたします。

◆公開連続講演会

数学部会にて開催予定です。

◆部会主催講演会・研修等

それぞれの部会の企画のもとに、随時開催されます。その都度、正門脇のガラス掲示板、学会掲示板、ホームページ、専攻オフィス掲示板等でお知らせいたします。自由にご出席ください。

◆学生研究奨励費

学生会員のグループが行う自主的な研究活動を対象に、研究経費を授与します。

A　一般研究奨励費
1グループ当たりの奨励費は8万円（ケースによっては15万円まで）

B　刊行補助費
自主的に進めた共同研究の成果を刊行しようとするグループに対して、その費用を援助するものの2種類があります。

グループの募集は、前期（5月中）と後期（10月中）の2回。研究グループは、助言者を決め、約9カ月の研究の後、研究成果を報告会で発表します。研究成果報告は学会ニュースに掲載します。

発表会はWebにて今年度は行います。

奨励費についての問い合わせは学会事務室へ。

◆刊行物

・学会ニュース

この号の他に年間3号刊行の予定です。学生ホール、図書館等学内に置きますので、ご自由にお持ちください。5月（卒業論文紹介）、11月（学生研究奨励費研究成果報告）、12月（連続講演会記録）に刊行の予定です。

◆学術雑誌

各部会関係の学術雑誌については、それぞれの専攻オフィスにお問い合わせください。おおむね年度末に刊行されています。

2022年度 学会活動報告

講演会等

〈学会主催のもの〉

◆始業講演

オリエンテーションサイト　ビデオ配信
「自己を知ること／他者を理解すること」
哲学専攻教授　榊原　哲也
（学会 哲学部会）

◆学生研究奨励賞受賞グループ研究発表

オリエンテーションサイト　ビデオ配信
「大学生活を快適に過ごすためのアプリ開発」
黒瀧かれん　他２名

◆公開連続講演会

読む×視る
―日本のマンガ・アニメにおける文学表象―

（企画：日本文学部会）

(1)「敦盛最期」を読む／視る
―『平家物語』の原作とアニメ―
東京女子大学教授　原田　敦史
(2) マンガ・アニメに視るカブキ的表象
―『ONE PIECE』を中心に―
東京女子大学教授　光延　真哉
(3) 中国古典文学の“名場面”の描き方
―横山光輝『三国志』を中心に―
東京女子大学専任講師　大橋　義武
(4)“視覚的叙述”としての戦争
―宮崎駿『ハウルの動く城』を中心に―
専修大学教授　米村みゆき
(5)『風立ちぬ』における女性像のバリエーション
―「風」との関係を中心に―
愛知淑徳大学助教　押山美知子

〈部会主催のもの〉

◆哲学部会 主催　●●●

(12.7)

「キリスト教と平和
―非暴力と非戦を求めて」

国際基督教大学 名誉教授　千葉　　眞

2022年12月7日に政治思想研究、平和学研究の第一人者である国際基督教大学名誉教授の千葉眞先生を講師としてお招きして、「キリスト教と平和―非暴力と非戦を求めて」と題して、哲学部会主催の講演会が講堂を会場にして300名余りの学生・教職員が出席する中開催された。講演では、内村鑑三、M.L.キング牧師、チャールズ・テイラーが取り上げられ、彼らのキリスト教に基づく平和思想とその実践が紹介された。内村は道理としても道徳としても政略としても「最もかしこき主義である」として非戦論を提唱し、キング牧師は「平和の福音」の立場から非暴力の思想と実践を展開し、テイラーは暴力を分析してアガペー（愛）による暴力の反転と克服を主張していることが詳細に説明された。そして愛と和解、正義と公正、非暴力と平和のメッセージは、宗教・民族・人種の相違を越えた普遍的アピールであると語られた。最後に非戦日本はどう生きるのかという問いに対しては、「近隣諸国との平和（紛争予防）外交に徹し、経済、文化、学術、民間の交流を活発化するための平和構築活動のイニシアティブを非戦日本が他の諸国と協力して担う」ことが肝要であると強調されて講演は締め括られた。

今日世界各地での暴力や紛争、ロシアのウクライナ侵攻による戦争勃発など心痛める出来事が次々と起こり、平和の実現のために私たちに何ができるのか重い問いが私たちに突きつけられている中、多くの示唆を与えられ、時宜に適った講演であった。

（文責　佐野正子）

◆国際英語部会 主催　●●●

(5.5)

「世界を日本に、日本を世界に伝えるためには
：英語を使うジャーナリストとして考えること」

NHK前国際放送局ワールドニュース部 専任部長　高橋　弘行

冒頭、ロシアのウクライナ侵攻などの悲劇を念頭に、「人間はなぜ過ちを繰り返すのか」、という問いかけから始まり、NHKの新人記者時代、夏になると毎週のように繰り返される水の死亡事故の取材から、「経験は遺伝しない、だから人は過ちを犯し続ける」との思いに至ったことを語られ、「それだからこそ、私たちは歴史から学ぶだけでなく、自らの経験を大切にしよう」と訴えら

れたことに考えさせられました。

NY 特派員時代、国連で活躍する日本人女性たちを見て、日本に比べ女性がはるかに能力を発揮できる国際機関の魅力に触れたという話は説得力がありました。帰国後、「各国放送局のニュースを国内に伝えるキャスター」「NHK ニュースを英語で世界に伝える編集長」等を歴任する中で感じた独自の「ニュースの見方」を語っていただきました。ちなみにキャスター時代にペアを組んだのは本学出身の徳住有香さんです。各国ニュースはその国の国民感情や意識から逃れることができないこと、それを認識した上でニュースを観ることが重要と指摘されました。また国際放送の編集長としての経験では英語ニュース制作で天皇陛下の生前退位を abdication と訳した経緯など生々しい放送現場の体験が紹介されました。

「英語は大きな武器だがあくまで道具。語るテーマ、専門性を持つ努力を続けて」とのお話は学生の心に残ったと思います。最後にリモートでも相手の心に「深く何かを残せる」人を目指そう、それには誠実・真剣な人になろうとの言葉でしめくくられました。

（文責　鶴田知佳子）

◆史学部会 主催　●●●

(12. 5)

「芝健介先生に聴く ご著書『ヒトラー　―虚像の独裁者』、そしてウクライナをめぐって」

東京女子大学 名誉教授　芝　　健介

東京女子大学学会・史学部会の共催のもとに、2022 年度の読史会大会は、「芝健介先生に聴く ご著書『ヒトラー―虚像の独裁者』、そしてウクライナをめぐって」として、2022 年 12 月 5 日に開催された。

本学名誉教授である芝健介先生をお招きし、近著『ヒトラー　―虚像の独裁者』（岩波新書、2021 年）について語っていただいた。本講演では、芝先生の『ヒトラー』の執筆プロセスが詳細に語られた。同書は従来の評伝の長所を継承しつつ、最新の知見が盛り込まれている。「歴史における個人の役割」の再考を通じて、ヒトラーの「神話」を解体する試みと、その神話が今なお生きている点が指摘された。

また、芝先生のこれまでの研究と重ね合わせて、本学学生も高い関心を寄せるロシア・ウクライナ戦争への言及もあった。ナチ・ドイツ研究を踏まえて、ウクライナ戦争についても「暴力を正当化する国家の行動を違法化し制御しうるか否か」というコメントが出された。

質疑応答では、学生から数々の質問が寄せられた。また、本講演は歴史文化専攻の「オーラル・ヒストリー」の演習実践のひとつでもあり、芝先生の研究への関心の原初に関わる事柄についても質問が出された。芝先生の人となりにも接近できる機会となり、後進の学生・研究者にとっても貴重な学びの機会となった。

（文責　柳原伸洋）

◆国際関係部会 主催　●●●

国際関係専攻が主催する東京女子大学学会国際関係部会では、2016 年度から「戦争・災害と人間」という統一テーマのもと、連続講演会を行ってきました。例年のように、影響をうける人間（被害者）の側の視点に立ち「いかにしたら人間性の尊厳を維持し、尊重できるのか」という問題意識を基底に据え、今年度は 2 名の方に講演をお願いしました。以下、講演会の報告です。

(6. 23)

「人道支援の現場とは？」

国連人道問題調整事務所ミャンマー事務所　小野　京子

22 年度の第 1 回は、小野京子氏（国連人道問題調整事務所ミャンマー事務所）による「人道支援の現場とは？」と題する講演が、6 月 23 日（木）4 時限、国際社会学科国際関係論必修科目「国際関係論Ⅰ」を利用して行われた。国連ニューヨーク本部にて、国連政務部シリア担当、国連事務総長スーダン特別代表の特別補佐官、国連プロジェクト・サービス機関（UNOPS）東京事務所代表などの要職を歴任されてきた小野氏は、現在の国連人道問題調整事務所（UNOCHA）ミャンマー事務所所長補佐という立場から、政変前後のミャンマーの内情とその中でのロヒンギャの人々の生活の様子を詳細に語ってくださった。また、難民に対する人道支援活動とはどのようなものなのか、食糧、医療、教育、住環境といった様々な面から具体的な写真や図表を通して説明があった。難民の厳しい現状を伝えるにとどまらず、逆境の中で難民の人々がいかにたくましく生き生きと生活しているか、前向きで明るい側面も多々あることを強調されていたことが印象的だった。さらに、シリアやミャンマーにおける人道支援の経験に加えて、国連職員という職務を選択するに至るキャリアパスについての紹介もあり、国際社会で働いてみたい、世界の人々を支援できる人間になりたいといった希望を持っている学生の気持ちを大きく鼓舞する講演となった。

（文責　西村もも子）

(12. 5)

「世界の難民状況と UNHCR の役割」

UNHCR 駐日事務所上級渉外担当官　工藤　浩一

第 2 回は 2022 年 12 月 5 日（月）3 時限に、「世界の難民状況と UNHCR の役割」と題して、工藤浩一氏（UNHCR 駐日事務所上級渉外担当官）による講演会を実施した。

工藤氏はスーダン、カザフスタン、スリランカ、フィリピン、パキスタン、アフガニスタン、タンザニアほか、多くの国、地域で難民、国内避難民、無国籍者の保護や自主帰還に従事されてきた。各地での体験（なかには命に関わるような体験も）はもちろん、近年のウクライナにおける UNHCR としての活動まで様々な写真も交えな

がら学生へ解説してくださった。

「難民」ということば、そしてUNHCRのマークに見慣れている学生も多いはずだが、そのマーク「難民を守る手」が象徴する難民保護活動の歴史的変遷、諸法規、難民認定問題、難民認定後の人々の生活の困難さ、国籍国へ戻り再び生活を始める「自主帰還」までの道のりについて、知見を深める時間となった。特に「難民」の定義、難民申請の手続きや問題点（日本政府の現状）、女性や子供たちに対するUNHCRの取り組みが学生の関心をひいたようである。

UNHCRとユニクロによるRISEプロジェクト、UNHCRが立ち上げたグローバル難民フォーラム共同議長国の一つに日本が選出された（会議開催は2023年12月の予定）ことまで話題は及び、講演会を通して、学生はUNHCRのおこなう難民保護の「過去」「現在」「未来」を考える時間ともなった。

なお、工藤氏には、後日、総合教養科目「平和学」担当の河合利修先生を通し、学生のリアクションペーパーに対し一つひとつ丁寧なコメントを寄せていただいた。お礼申し上げます。

（文責　國原美佐子）

2023年度もこの統一テーマで連続講演会を行います。専攻を超えた積極的なご参加をお待ちしています。

◆経済学部会 主催 ●●●

(6. 28)

「ミャンマー（ビルマ）の人道危機を読み解く」

上智大学総合グローバル学部 教授　根本　　敬

国軍の思想と経済的基盤、市民の抵抗と未来像、動きの取れない国際社会

国際社会とメディアの関心がロシア軍のウクライナへ侵攻に集中するなか、2021年2月1日のクーデター以降、同じく人道危機にさらされているミャンマー（ビルマ）については人々の関心が薄らいでいる。本講演ではそうした傾向に警鐘を鳴らすべく、ミャンマー国軍によるクーデターの経緯と背景、長期化する市民への弾圧の実態を具体的に紹介した。加えて、「憲法に基づく非常事態宣言であり、クーデターではない」と主張する国軍の論理を軸に、「政治に関与する国軍」という彼らの「使命感」の歴史的な成立過程を説明した。

国軍は1948年1月の独立以降、休むことなく74年間にわたって戦闘を続けており、その際の「敵」の大半は外国軍ではなくミャンマー国内の居住者であった。併行して数十年かけ膨大な経済利権をつくりあげ、国民の支持基盤がなくても「食べていける」体制をつくりあげた。これらの要因が国民を「殺し慣れ」する国軍の傾向をつくりあげたといえる。

一方、市民側の根強い抵抗と、クーデター後2か月半たった2021年4月にクーデター政権に対抗すべく生まれた国民統一政府（NUG）の特徴と、彼らが抱く未来のミャンマー連邦像（「フェデラル民主制」に基づく新しい連邦国家）について解説した。また、一部市民が自らを守るために武器を調達して国軍に戦いを挑んでいる現実もとりあげ、長い歴史的背景を有する山岳地帯の少数民族武装勢力との連帯がミャンマーで成立しつつあることを指摘した。このような国民の抵抗により、クーデター政権側の実効支配領域は徐々に削られている。

最後に国際社会が一枚岩になれない現実に触れ、ウクライナ問題とちがって「国内の政治対立」とみなされがちなミャンマーを、人道危機が進行しているにもかかわらず、どの国や機関も深刻な問題として責任もって関与しようとしない状況について説明した。特に日本政府のかかわり方の問題性をとりあげ、その一例として、クーデター後も防衛省が税金を用いてミャンマー国軍の若手将校を防衛大学校や自衛隊に「留学生」として受け入れ続けている事実を指摘した。

(12. 7)

「金融機関のビジネス戦略 ～邦銀・米銀での経験を踏まえて」

バンク・オブ・アメリカ・N・A東京支店 副会長　木越　　純

経済学部会では2022年12月7日、大手米銀バンク・オブ・アメリカ・N・A東京支店 副会長の木越純氏を講師として招き、掲題講演会を開催した（注：肩書は当時。現・同行東京支店長）。木越氏は大学卒業後、邦銀に入行し、その後、大手米銀JPモルガンで勤務されたこともある現役のトップバンカーである。邦銀と米銀、東京とロンドンでの経験を踏まえつつ、金融ビジネスの実際や金融機関の戦略について本音で語っていただいた。

木越氏は15年前に米銀に転職した際に「上司は女性、ライバルは世界中、何事もスピード」であることにカルチャーショックを感じたという。そうした仕事のスタイルが米銀の競争力の源泉でもあったようである。バンク・オブ・アメリカはリーマン・ショック後に従前の収益偏重主義を改め、「責任ある成長」を経営の目標として掲げた。責任ある成長とは「言い訳なしの成長」、「顧客重視の成長」、「リスク許容の範囲内での成長」、そして「持続性のある成長」を柱とするものであり、株主、顧客、従業員、社会の全てのステークホルダーの利益に配慮したものである。

木越氏によれば、米銀には会社として積極的に芸術活動（アート）に取り組み、アートの力で銀行のカルチャーを変え、新しい戦略を内外に示そうとする事例が多いそうだ。バンク・オブ・アメリカも文化財の修復プロジェクトに日本でも積極的に参加している。木越氏自身、バンカーの傍らで武蔵野美術大学大学院に通い、2021年に修士号を取得したという。

講演では東女生の卒業後の進路についてもアドバイスをいただいた。木越氏の元部下で現在は英国のビジネススクールで私費留学中の東女OGの先輩からは「Girls Be Ambitious!」とのエールも届けられた。

約50名の学生が熱心に聞き入り、講義後は質疑と拍手が止まらない盛況かつ有意義な講演会であった。

（文責　長谷川克之）

◆コミュニティ構想部会部会 主催 ●●●

(10. 24)

「コミュニティと文化」

社会デザイン研究者　三浦　　展

東京女子大学学会講演会（コミュニティ構想専攻）が去る10月24日（月）9時から10時30分に開催された。講師は『ファスト風土化する日本―郊外化とその病理（洋泉社，2004）』の著者でもある三浦展氏で、ファスト風土化の観点から「コミュニティと文化」をテーマに、地方及び郊外の消費社会による画一化についてお話しいただいた。

講義は対面及びリモートで行なわれ、約50名の参加があった。なお、リモートによる参加者が20名超いたが、機器の不具合によって参加が叶わなかった。

講演は、ファスト風土化のなにが問題なのか？という問題提起から始まった。さらに、海外事例を交えながら、ファスト風土の問題が日本に限った現象ではないという点を三浦氏は強調する。後半では、吉祥寺や阿佐ヶ谷、西荻窪など、本学学生にもとっても身近な街を話題にしながら、ニューアーバニズムの考え方を引用し、日本の街のポテンシャルの高さについても触れる。また、グリーンスプリングス（立川）、ボーナストラック（下北沢）、ソラトカゼト（西新井）、など近年の商業開発事例を紹介、近年の消費文化の変化についても触れながら、今後の商業開発とまちづくりのあり方などについても話が及んだ。

講演を聞いた、学生の一人からは「三浦さんが考えるまちづくりとは？」と質問があり、楽しいだけではなく、悲しいときにも楽しめる「横丁」のようなまちが理想と三浦氏が答えていたのが印象的だった。

（文責　籾山真人）

(12. 14)

空を守る官民連携
「地域航空サービスアライアンス　～観光だけでなく、離島の医療や生活、災害時の移動を守れ！」

日本航空株式会社 常務執行役員 旅客営業本部長　越智健一郎

東京女子大学学会コミュニティ構想専攻部会は、2022年12月14日（水）3限に、空を守る官民連携「地域航空サービスアライアンス ～観光だけでなく、離島の医療や生活、災害時の移動を守れ！」と題した講演会を実施しました。コミュニティ構想専攻では、地域・コミュニティ、企業・産業、政府・自治体が協力して社会的課題の解決に取り組むことを研究しています。各セクターの連携とともに、ビジネス・セクターが公共的課題の解決を重要視するようになってきており、実際に行動する企業も多くなってきました。このトレンドの最新事例を学ぶため、日本航空株式会社 常務執行役員 旅客営業本部長 越智健一郎氏に講演をお願いしました。九州の地域航空（天草エアライン、オリエンタルエアブリッジ、日本エアコミューター）は経営不安を抱え、このままでは離島等の病院がない地域に医師が行けない、災害時に地域住民の移動手段がなくなってしまう等の恐れがありました。国が音頭をとり、自治体同士が利害調整をし、民間航空会社は系列を超えた協業に挑戦した結果、地域航空会社3社及び大手航空会社2社（JAL、ANA）による事業組合が発足し、空の移動は守られることになったのです。日本エアコミューター社長も務めた越智氏から、困難を極めた誕生から現在までの経緯、将来の見通しについて臨場感あふれるお話を頂きました。複数の参加学生から鋭い質問が寄せられ質疑や意見交換も活発に行われました。

（文責　矢ケ崎紀子）

◆数学部会 主催 ●●●

(12. 7)

高次元ニューラルネットワーク

立教大学大学院人工知能科学研究科　新田　　徹

ニューラルネットワークを高次元領域に拡張した高次元ニューラルネットワークについて解説した。ニューラルネットワークは近年活発に研究開発がなされているディープラーニング（深層学習）が適用される数理モデルの一種である。ディープラーニングは2012年頃から注目されるようになり、現在では自動運転を含めた社会実装レベルの研究開発も盛んに進められている。本講演では、まず導入として、ニューラルネットワークモデルおよびニューラルネットワークを高次元化する方法について述べた後、複素ニューラルネットワークの各種モデル、利点、2次元アフィン変換学習能力、特異点などの特性、フラクタル図形生成やコンピュータビジョンへの応用について概説した。次に、双曲数を用いた双曲ニューラルネットワークモデルを紹介し、その双曲回転学習能力や活性化関数の性質について解説した。双曲数は複素数の親戚のような2次元の数である。最後に、最近の展開として、複素ニューラルネットワークおよび四元数ニューラルネットワークを深層学習の枠組みに組み入れるための道具立ての整備（現代化）について述べた後、それらの応用例を紹介した。四元数は複素数を4次元に拡張した数である。

◆自然科学・情報処理部会 主催 ●●●

(12.21)

宇宙の進化はどこまで解明されたか

東京大学 名誉教授　吉村　太彦

1940年代のガモフに始まるビッグバン宇宙論は、元素合成理論と宇宙背景マイクロ波の発見を経て、精密化され、その後の詳細な宇宙観測と精緻な理論計算により宇宙論の確たる基盤となった。一方、素粒子物理は1970年代の黄金期を経て、物質の基本的構成要素としてクオークとレプトンを明らかにし、それらを支配する力の法則を素粒子標準理論として定式化し、多様な実験により、標準理論は疑問の余地なく立証された。

宇宙創成期を解明するには、よりミクロな法則が必要とされるが、標準理論を超える大統一理論が早くから提案されていた。その後、講演者をはじめとする多くの研究者により、大統一理論に基づく宇宙の物質・反物質不均衡の説明、インフレーション模型が提案され、宇宙創成期における興味ある知見を加えた。さらに、我が国のニュートリノ実験の成果により、標準理論をこえる物理法則が見え始め、極微の世界と極大の世界が融合した分野の創成を達しつつある。

本講演では、宇宙の進化がどこまで解明されたかを研究現場に関わることができた研究者の立場から説明された。

（文責　尾田欣也）

◆外国語部会 主催 ●●●

(12.20)

「二外教員ぶっちゃけトーク ―本学教員が語る外国語の魅力と勉強法」

東京女子大学日本文学専攻 専任講師　大橋　義武

外国語部会主催講演会を終えて

外国語部会では、2022年度の催しとして「二外教員ぶっちゃけトーク―本学教員が語る外国語の魅力と勉強法」と題する講演会を行った。今回の特徴としては、第二外国語専任教員が全員登壇したことと、感染症対策を兼ねつつ多くの人に見てもらうため12月20日の収録（対面形式）のあと「後日配信」の措置をとったことが挙げられる。

外国への／からの移動が難しくなっている状況がある中で、「外」の世界を知る経路としての「外国語」を学ぶ意義について学生たちに考えてもらいたい―私たちはこうした意図から、教員が自らの経験を具体的に伝える「場」の設定を試みた。留学や検定試験、あるいは専門の研究について幅広く語ってみせるために、専任全員が登壇する形式が採られることとなった。

収録当日、まず第一部で教員が各々担当する言語との出会いや学びの経験を述べ、さらに留学についての心構えや実際の収穫・失敗談を語った。会場参加者から回収した感想によれば、新鮮な或いは意外な話が多くあり、「外国語とのかかわり方」のヒントにもなったようである。この他、関心の高かった「検定試験」についての説明も加えられた。

第二部では、各教員が専門と外国語とのかかわりについて論じた。それぞれの経験と個性を踏まえて、様々な学問分野で外国語が活かされていることを知って、刺激を受けた学生も少なくなかったようだ。最後に第三部として質問に回答するコーナーを設け、その中で選択授業についての案内などを行った。コメントシートでも色々な感想が寄せられたが、第二外国語を大学で学ぶことの意義をあらためて考えてもらえたようで、主催側としては手応えを感じている。

◆健康・運動科学部会 主催 ●●●

(7.7)

身近な遺伝子の話

国立研究開発法人 国立国際医療センター研究所
遺伝子診断治療開発研究部 上級研究員　我妻　玲

「あなたは、悲観的かそれとも楽観的か？」という問いかけから講演会は始まった。遺伝が様々な形質に与える影響は大きいが、その中でも性格についての話を中心に進んだ。まずセロトニンが低下するとドーパミン（喜び、快楽など）やノルアドレナリン（恐怖、驚きなど）のコントロールが不安定になりバランスを崩すことで、攻撃性が高まり、不安やうつ・パニック障害などの精神症状を引き起こす、と不安感情とセロトニンの関係について解説された。この重要なセロトニンの90％は、腸で産生されるという。セロトニントランスポーター（5-HTT）遺伝子は、セロトニンの再取り込みに関与しており、L型：5-HTTの発現量多い（セロトニンの再取り込み量が多い）・S型：5-HTTの発現量少ない（セロトニンの再取り込み量少ない）に分けられ、不安の感じやすさをLL型：楽観的・SL型：中間・SS型：悲観的の三つに分けて説明された。日本人はSS型が70％近くあり、アメリカ人は20％ほどであることを話された。また、男性は女性よりもセロトニン合成能力が1.5倍高い。その原因の一つには排卵後や月経前・月経中はセロトニン活性が低いという月経周期とセロトニン活性の関係も明らかにされた。そしてセロトニン神経を活性化させる方法（太陽光を浴びる・スキンシップやグルーミング・リズム運動）を示してくださった。しかし、ただセロトニンの量を増やせばいいというのではなく、ドーパミンやノルアドレナリンなどの他の神経伝達物質とのバランスがとても重要であることを繰り返しお話しされた。

遺伝子というと、とても難しいもののように感じるが、日常生活に密着した視点からお話を伺うことができ、ちょうどコロナ禍の今だからこそ学生たちは不安を感じる遺伝子について知り、改めて自分のこととして考えることができたタイムリーな講演会であった。

（文責　曽我芳枝）

(11. 25)

自分の体と向き合うワーク

法政大学社会学部メディア社会学科 准教授　越部　清美

越部清美先生は、様々なジャンルのダンスや身体表現の専門家で「からだアートパフォーマンス」が人格形成につながるという観点から教育・研究や地域での講演活動をされています。本学の学生にとっても大きな学びになると考え、「自分の体と向き合うワーク」講演会を企画いたしました。

心地よいBGMの中、リラックスしたムードで講演が始まり、足の裏のもみほぐしを行いました。足の裏は、普段立ったり歩いたりしている私達の体の重さを支えてくれています。足の裏や足の指の間を優しくマッサージし、労わるように丁寧に「お手入れ」すると数分で「あたたかくなる」「スッキリした」「足の長さが長くなった」「色が変化した」など様々な感想が受講者からきかれ、自分の体にじっくりと向きあうことができたようでした。太鼓と音楽のリズムにのってみんなで歩くワークでは、膝でリズムをとり様々な速さで体を動かす一体感を体験しました。2人1組での鏡のワーク、10人ほどのグループでの動きの工場ワークでは、1人の動きを他の人が真似をして動きます。最初は戸惑いがちであった受講者達も、お互いの個性的な動きを見て自然に笑顔が溢れ、越部先生の「いいね！ いいよ！」という声掛けにより、一人ひとりの素晴らしい個性がより一層キラキラと輝き始める様子は圧巻でした。「身体はアート」、「一番の主治医は自分」との越部先生の言葉が学生の心に残り「自分の体」「自分の可能性」への気付きにつながったようでした。

（文責　藤田恵理）

(11. 30)

伝統太極拳の身体術を通して、自分をデザインしよう

放送大学 非常勤講師　石水　極子

東洋的な身体技法である太極拳は、自己の身体への理解を深め、心身のコンディショニング法を学ぶのに適した教材と考え、本講演会を企画しました。伝統太極拳の専門家である石水極子先生をお招きし、自分を知る身体術について実技研修をしていただきました。伝統太極拳は、心で感じ、体で実践し、心身を調和させるメソッドで、究極の自身の健康維持法です。そのあり方を問うことで身を護る方法を模索でき、居心地の良い自分へと導くことを促すことができます。そのような考え方を内包した【護身術】が伝統太極拳であるということです。自身にゆっくりじっくり問いかけつつ、身体の姿勢（ポーズ）、動き（フレーズ）、護身術（メソッド）を体験して、自身の身体・心・呼吸を洗練させることができます。研修ではスワイショウにより全身および肩関節のほぐしを行いました。ペアワークによりスワイショウ実践後に腕の可動域が広がることを確認し、身体の構造や解剖学に基づく重心を意識した正しい立ち方を体験することにより、普段いかに自分の身体を意識していないかに気づくことができました。石水先生による伝統太極拳の実演では、しなやかでゆっくりと流れるような動きの中で、体の軸が常に正しい位置におかれているために、美しい動きが可能になることを理解することができました。太極拳は体を整えるだけでなく、心も整えることができるメソッドであることを実習から学ぶことができました。

（文責　藤田恵理）

学生研究奨励費

【後期募集分】

相互構築的な学びの考察
　──オンライン学習支援の活動を通して──
　　爲国結莉恵　他8名

地域日本語活動を通じて学ぶ多文化共生
　──参加学生の自己成長の視点から──
　　西村　　愛　他3名

【前期募集分】

オンライン学習支援で得られる学び
　子どもたちと学生の成長に着目して
　　澁谷こはる　他4名

本学図書館所蔵『源氏百人一首』の翻刻と字母研究
　　進　　実来　他6名

屋外空間のさらなる活用に向けた社会実験
　　伊藤　花織　他8名

地域における持続的な日本語活動
　～VEC日本語活動を例に～
　　東樹　美和　他3名

学生研究奨励費成果発表会（7.19/1.18 1.20）

刊行物

◆東京女子大学学会ニュース

第221号（ 6.30）2021年度学会活動報告
第222号（ 7.29）卒業論文紹介
第223号（11.15）学生研究奨励費成果報告
第224号（ 3.15）連続講演会報告

【学会から補助を受けている刊行物】

◆日本文學　第119号（東京女子大学学会日本文学部会）

「長恨歌」に見る男の「情」と女の「情」
　──「但令心似金鈿堅、天上人間會相見」などをめぐって──
　　今井　久代

前田家本『承久記』論　原田　敦史

泉鏡花の蛇婦譚研究
──嫉妬しない蛇婦について──　松本なるみ

浅草という舞台
──時間描写の視点から──　大川　和恵

須賀敦子の翻訳
──『Narratori giapponesi moderni（日本現代文学選）』に見る暮らし──　藥師寺美穂

芥川龍之介「上海游記」のコンテクスト
──日本と中国の一次資料を通して見えてくる都市体験──
和田博文・高潔　編

民国期中学国語教科書のなかの『三国志演義』
──教材化と作品評価について──　大橋　義武

多義動詞の用法分析
──書き言葉と話し言葉における「受ける」の用法比較──
石田　真子

第四十二回　松村緑賞

第三回　比較文化研究所賞

第三回　女性学研究所賞

二〇二一年九月・二〇二二年三月卒業論文題目

二〇二二年三月修士論文題目

東京女子大学日本文学研究会規約

◆ Essays and Studies of the Department of English Tokyo Woman's Christian University Graduation Essays 2021－2022
（東京女子大学国際英語部会）

A Study of William Shakespeare:
Fairies in *A Midsummer Night's Dream* ..... Hibiki Omokawa

A Study of Henry James:
Out of Heteronormativity in *The Aspern Papers* ..... Harune Tadano

A Study of Loanwords:
Color Terms "Blue" and "Green" in Japanese Loanwords and Native Words ..... Mao Nagayoshi

A Study of Orientalism:
An Examination of Japanese Cultural Creation through the Medium of Technology ..... Saho Kumabe

English as a Lingua Franca:
Japanese University Students' Awareness of ELF and Effects of Awareness-Raising Activities ..... Erika Inagaki

A Comparative Study on the Japanese Subtitles and Dubbed Version of *Titanic* ..... Manami Sato

A Study on Translation:
Focusing on Two Japanese Versions of *The Secret Garden* ..... Yukino Yamane

Graduation Essay Titles 2021－2022

◆史論　第76集（東京女子大学読史会）

◆東京女子大学国際関係研究　第11号
（東京女子大学国際関係専攻）

◆東京女子大学社会学年報　第11号
（東京女子大学社会学専攻）

■論文■

高度情報化社会におけるプライバシー不安
──ジェンダー差に注目して ..... 山本　耕平
赤堀　三郎

■研究ノート■

労働概念の歴史（4） ..... 酒巻　秀明

■修士論文要旨■

アセクシュアル自認男性のおける葛藤
──男らしさと強制的性愛規範の不可視性に着目して
..... 関口　麗美

□社会学専攻　2022年度卒業論文題目一覧

◆東京女子大学経済研究　第11号　卒業論文要約号
（東京女子大学経済学部専攻）

電子書籍の将来の展望と影響 ..... 浅野　有希

日本の貿易と日EU経済連携協定 ..... 三田　幸乃

日本における働く子ども
──ヤングケアラー問題を中心に── ..... 能登原寛子

地方創生における観光資源の価値
──犬山城の事例── ..... 橋本　　玲

健全なトラック輸送市場のあり方 ..... 牧野　未来

顧客ロイヤルティに関する一考察 ..... 村上紗侑子

人工知能の発達が労働に及ぼす影響 ..... 吉田　　茜

2022年度卒業論文題目一覧

◆2022年度　卒業論文集　東京女子大学現代教養学部国際社会学科コミュニティ構想専攻
伊奈ゼミ・関村ゼミ・籾山ゼミ

2022年度　卒業論文集　東京女子大学現代教養学部国際社会学科コミュニティ構想専攻
藤稿ゼミ・矢ケ崎ゼミ
（東京女子大学コミュニティ構想専攻）

◆東京女子大学心理学専攻卒業論文要約集2022年度（2023.3）
（東京女子大学心理学専攻）

◆ Culture and Communication 第35号
（東京女子大学コミュニケーション専攻）

編集・発行　東京女子大学学会